

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

21 エッフェル塔三十六景（2020年12月24日）

葛飾北斎（1760-1849）は、江戸時代を代表する浮世絵師で、世界的に高い人気を誇っています。19世紀後半から始まったジャポニズムの流行によって、大量の浮世絵がヨーロッパに持ち込まれました。フィンセント・ファン・ゴッホ、エドガー・ドガ、エミール・ガレなどフランスでも多くの芸術家が、北斎の影響を受けたと言われています。

北斎の影響を受けたフランス人の一人に、画家であり版画家のアンリ・リヴィエール（1864-1951）がいます。リヴィエールは、北斎の「富嶽三十六景」に触発されて「エッフェル塔三十六景」を制作しました。フランス革命100周年を記念して1889年に開催された第四回パリ万国博覧会の目玉とするために建設が進められていたエッフェル塔やパリの街並み、そして労働者や庶民の生活を、五色刷りのリトグラフで描きました。



Les Chantiers de la Tour Eiffel/エッフェル塔の建設現場



Du Quai de Passy ←
パッシー河岸より



Des jardins du Trocadéro, l'automne ←
トロカデロ公園より、秋



パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

北斎の「富嶽三十六景」は、実は「富嶽四十六景」です。好評だったため、十枚多く制作されたそうです。それまで、浮世絵と言えば、美人画や役者絵といった人物画が主流でしたが、北斎は風景画という新たなジャンルを確立させました。

2020年から発給されている日本のパスポートには、ページ毎に異なる富嶽三十六景の図柄が使われています。日本人のパスポートをチェックする外国の入国審査官は、出入国のスタンプを押す際に「富嶽三十六景」に気付くでしょうか。

また、2024年には、日本のお札の図柄が変更され、新1000円札には「富嶽三十六景」の「神奈川沖浪裏」(La Grande Vague de Kanagawa)の図柄が使われることになっています。「富嶽三十六景」は、北斎によってこの世に送り出されてから200年近い年月を経て、日本を代表する絵の一つとしてさらに広く親しまれていくことでしょう。

